

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見てくるアメリカの風景

文=ジヨージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第13回 ザ・バンド 「アケイディアの流木」 ケイジャンの人々のルーツ



The Band
“Northern Lights-Southern Cross”
ザ・バンド『南十字星』
Capitol ST11440 [1975]
→EMI TOCP67398

ともと開発したのはフランス人だが、そこに住みはじめたイギリス人がフランス人を追い出し始め、1755年には全フランス人のエスニック・クレンジング（民族浄化）が始まった。その後、1756年から1763年にかけて八七年戦争が、追いつきその地域をアケイディアといい、追いつかれたフランス人たちがアケイディアンと呼ばれるようになった。曲の邦題は「アケイディアの流木」。流木みたいに流れていったのだ。ただし、この曲は歴史を正しくは伝えていない。アートのなストーリーのために、少し変えてはいる。

The war was over and the spirit was broken

The hills were smoking as the men withdrew

戦争が終わると、俺たちのスピリットは壊れていた。このスピリットは負けた軍隊だけでなく、住んでいたフランス人のことも指している。男たちが引き上げていくと、山からは煙が出ていた。畑や家はもう焼かれてしまっていたのだ。ただし歴史的な話

今回の曲を興味深く聴くようになったのは、ニューオーリンズの周りにある沼地、バイユーに旅した時からだ。そこに住む人たちは皆フランス語を話すケイジャンだった。風貌はアメリカ人らしいのに、英語を話さないことに驚いた。それからというもの、ケイジャンという言葉と文化、歴史に興味を持ち、ついに俺はこの曲に出会った。ザ・バンドが「Acadian Driftwood」を収録したアルバム『南十字星』をリリースしたのは1975年のこと。この曲はカナダに住んでいたフランス人を歌っている。曲を書いたのはザ・バンドのメンバーであるカナダ人のロビー・ロバートソン。彼はこの曲で、自分の国の歴史を歌うことに挑戦したんだ。アケイディアとはカナダとアメリカが交わる北東部で、元フランスの植民地だった太平洋に面した地域のこと。も

でなく、イメージだ。本当はイギリスは戦争が始まる前にフランス人を追いついた。後ではなく、前に。「men」は軍人を指す。

We stood on the cliffs
Oh and watched the ships
Slowly sinking to their rendezvous

崖の上から俺たちは船がランデヴーに沈んでいくのを見ていたとある。これは沈没という意味だけではなく、水平線に消えていくこと。地球は丸いから、船は水平線の向こうへ進むときは次第に沈んでいくように見える。つまりフランスに戻ることがランデヴーで、わざと仏語を使っている。

They signed a treaty and our homes
were taken
Love ones forsaken
They didn't give a damn
Tried to raise a family
End up the enemy

戦争の終わりに勝者イギリスと負けたフランスの間で交わされた「treaty」＝(条約)

のため、フランス人はすべてを取られた。本当は戦争前に追いつかれたから、歴史にはない話だけど。「didn't give a damn」これは私には関係ないというときに使う言葉だ。つまりアケイディアンは普通の生活を営みただけなのに、イギリスはおかまいたしに攻めてきたのだ。

Over what went down on the Plains
of Abraham

彼らはフランス人で、ただの農家の人たちだった。アブラハムの野原で起こったことは関係ないと言ってる。アブラハムの戦いは単なるひとつの戦闘だったが、イメージ的に名前がいろいろから、まるでそれがすべての戦いのように使ったのだろう。

Acadian driftwood
Gypsy tail wind
They call my home the land of snow
Canadian cold front movin' in
What a way to ride
Oh what a way to go

ここでサビが入る。すべてイメージで歌っている。アケイディアンの流木、ジプシーの追い風。俺たちの郷里は雪の国だ。カナダに「cold front」＝最初の寒気が入ってきた。ひどい乗り方、ひどい行き方、これは追いつかれたためにひどい扱いかたをされている。「what a way to go」は「あまりよくないというだけでなく、最低の状況になったときにも使う」。

Then some returned to the motherland
The high command had them cast away
Some stayed on to finish what they started
They never parted
They're just built that way

何人かのアケイディアンはマザerlandであるフランスに戻った。イギリスの軍隊の「high command」＝軍のトップが彼らアケイディアンを追い出した。しかし全員が追いつかれたわけではなく、何人かのアケイディアンはなぜか残っていた。始めたことをやり続けたいから、どこにも移動しなかったのだ。「They're just built that

way、氣質がそろうさせたのだろう。頑固なのだろうか。

We had kin living south of the border
They're a little older and they've been
around
They wrote a letter life is a whole lot
better
So pull up your stakes, children and
come on down

俺たちアケイディアンは国境の南に親戚がいた。Kinとは親戚のことだ。彼らはかなり年上で、長年いろいろな経験してきた人たちだ。今こそカナダの国境の南はアメリカだが、この事件が起こった時はまだアメリカはなく、国境もなかった。been aroundは経験あるという意味だ。

彼らに手紙づいてもらった。So pull up your stakes = 子供たち、もうステークを抜いていらっしやいと。ステークは肉ではなく、地面に差し込む木だ。開拓地では自分の土地に木を打ち込むんだ。転じてステークを抜くとは、ルーツ(根っこ、つまり起源)を抜くことをいう。

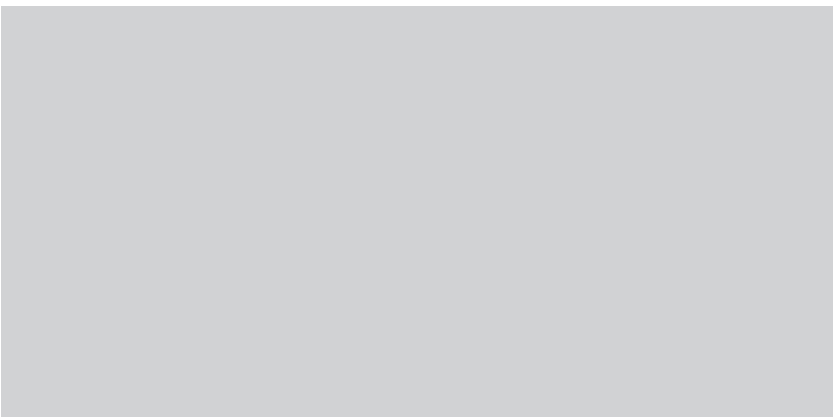
ンス領の諸島だ。しかし持ち出すものは、もう何もなかったという。

Broke down along the coast but what
hurt the most
Was when the people there said
"You better keep movin' on"

一番苦しかったのは、南に向かって船を走らせている途中、この港に寄ってもフランス人だから出て行けとらわれたこと。船が故障したとやべえ、もういわれた。イギリス人の土地だったからた。

Everlasting summer filled with ill
content
This government had us walkin' in
chains
This isn't my turf
This ain't my season
Can't think of one good reason to
remain

ここからは辿り着いた場所の話になる。不安で一杯の永遠の夏、それは南にある暖



Fifteen under zero when the day
became a threat
My clothes was wet and I was
drenched to the bone
Been out ice fishing, too much repeti-
tion
Make a man want to leave the only
home he's known

気温がマイナス15度になって、生活する(the day)上での脅威になった。服は濡れていて、俺は骨まで水が染み込んでいた。drenched to the boneは、骨に染み込むという意味だ。氷の上での釣り = ice fishingをするのは辛く、誰でも故郷を出たくなる。

Sailed out of the gulf heading for St.
Pierre
Nothing to declare all we had was gone

湾からセイント・ピエールに向かって、船で旅出った。セイント・ピエールはカナダから太平洋の20キロぐらい沖にあるフラ

かいニューオーリンズあたりのこと。アケイディアンは各地に住処を求めたが受け入れてもらえず、多くはニューオーリンズに辿り着いたのだ。しかし政府は奴隷のようにチェーンをはめて歩かせた。ここは俺の土地 = turfではない、俺の季節ではない。彼らには暖かい南が合わなかったのだろう。

We worked in the sugar fields up
from New Orleans
It was ever green up until the floods
You could call it an omen
Points you where you're going
Set my compass north I got winter in
my blood

ニューオーリンズから北のサトウキビ畑で働いた。洪水までは緑だった。この洪水は出て行けという兆しじゃないだろうか。Set my compass northはコンパスを北に向けて旅立とうということだ。

(French lyrics)



ジョージ・カックル /
GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。
1956年、鎌倉生まれ。
18歳で新宿2丁目のロッ
ク・バー<開拓地>で、
音楽の世界にのめり込
む。ハワイアンなどの
CDをプロデュースする傍
ら、インターFMでは音楽
番組「レイジーサンデー」
のパーソナリティをつと
め、音楽通ぶりを披露。
さらにサーフ・イベントな
どのMCでも活躍。
http://whatsupmusic
inc.com

Sais tu, A-ca-die-j'ai le mal du pays
Ta neige, Acadie, fait des larmes au
soleil
J'arrive Acadie, teedle um, teedle um,
teedle ooh

ここまでは英語の詩で、ここからフランス語が入る。アケイディアに行きたいと。今はケイジャン音楽や料理で知られているが、その名前はカナダを追われたフランス人が住んでいた土地に由来する。アケイディアンは農家の生まれだったが、逆に戦いの末に辿り着いたニューオーリンズは都会で、自分たちには肌が合わず、回りの沼地へと移っていった。そしてそこに住んでいた奴隷やネイティブ・アメリカンと血縁関係を深めていったのだ。こうやってアケイディアンは独特の文化を生み出していった。この歌はとても深いカナダの哀しい歴史だ。

史を歌っている。詩を書いたロビー・ロバートソンはカナダ人だが、アメリカで活動している。その上、ネイティブ・アメリカ

ンの血も入っている。そんな彼は自分と彼の姿を重ね合わせているのだと思う。